

平成 17 年度一橋大学附属図書館企画展示

# オウエンから一橋へ

## 消費組合の成立と展開

ロバート・オウエンは協同組合運動の思想的源流とされるイギリスの思想家である。一橋大学附属図書館はオウエンおよび彼の影響を受けたイギリスの協同組合関係のコレクションが充実している。殊に外池文庫には消費組合の創始とされるロッチデール公正先駆者組合の一次資料も含まれており、世界的に貴重なコレクションである。



本年度企画展示では、オウエンの思想と事跡およびイギリスにおける消費組合の成立から、日本での消費組合思想の受容と展開過程を概観する。これは、明治初期の翻訳書から一橋消費組合に至るまで、オウエンが遺した足跡を一橋で探す旅であるともいえる。



### 【展示】

期間：平成17年11月1日(火)～2日(水)  
4日(金)～11日(金)

11月3日(祝)は一橋祭準備日のため休室します

入場：9時30分～16時30分(閉室17時)

場所：一橋大学附属図書館公開展示室  
(西キャンパス 時計台棟1階)

入場無料

### 【講演】

日時：平成17年11月7日(月) 14時～15時30分

場所：一橋大学附属図書館研修セミナールーム  
(西キャンパス 時計台棟1階)

講師：都築忠七(一橋大学名誉教授，  
ロバート・オウエン協会会長)

入場無料



## ロバート・オウエンの人と思想



肖像

Robert Owen (1906) 所収

ロバート・オウエン (Robert Owen) は、1771年5月14日イギリス・ウェールズ地方のニュータウンに、馬具商と金物商を兼業する父母の6番目の子として生まれる。4歳頃、小学校に入学した後、7歳で校長の助手兼教師となったオウエンは10歳になると、自ら望んで商店に住み込みで働くようになる。その後、紡績業で成功し、1799年、スコットランドのニューラナーク工場を買収し、支配人となる。

産業革命で工場労働は機械化が進んだが、労働者の労働条件・生活環境は劣悪で、オウエンの目には、大多数の労働者は怠惰で不道德、労働意欲のない人間と映った。初期の主著 *A new view of society* (社会にかんする新見解 1813) では、どのような性格も適切な手段を用いることによって形成できるという環境決定論を主張し

た。そしてその手段は社会に影響力を持つ人達が保有していると述べ、工場内に学校や幼稚園を設立し、独特の教育方針で児童・成人教育にあたった。また良品を原価で販売する売店を設置するなど、労働条件の改善を図り、経営者への信頼と労働意欲の向上をめざした。

博愛主義から社会主義への転機ともいわれる 1817 年の *Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor* (労働貧民救済委員会への答申書)、1820 年の *Report to the county of Lanark* (ラナーク州への報告) で、貧窮にあえぐ労働階級の救済策として生産か



William Rathbone に宛てたオウエン直筆の書簡  
(1824)

ら消費までを構成員自らが行う大規模な協同村の構想を提案するが、私的所有制度を否定したこれらの報告は議会には受け入れられなかった。しかしオウエンは、新聞への投稿や講演会など議会外の活動を強め、彼の思想に同調する人達はその数を増していく。

オウエンはこの協同村構想を基に、アメリカに渡り、私財を投じて設立した「ニュー・ハーモニー」(1825年)の実験、帰英後「クイーンウッド・コミュニティ」の設立(1839年)を試みるが、いずれも失敗に終わった。

1832 年には労働時間を単位とする Labour Note (労働貨幣)によって生産物の交換を行う National Equitable Labour Exchange (労働公正交換所)を創設するが2年足らずで閉鎖、労働組合の連合を図り、Grand National Consolidated Trades Union を成立させる(1834年)が、数ヶ月で崩壊する。

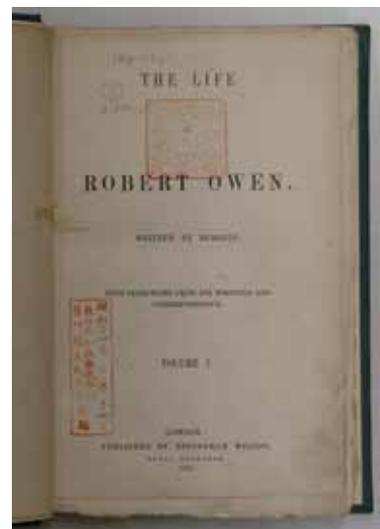
その後も著作や定期刊行物の創刊、講演活動を繰り広げ、*The life of Robert Owen* (自叙伝) の第1巻を出版した翌 1858 年 11 月 7 日、87 歳で生地にて没する。

彼の協同思想と、彼の影響を受けた Owenite(オウエン主義者)達がイギリスの協同組合運動の主要な担い手であったことからオウエンは「協同組合運動の父」と称えられている。

*The life of Robert Owen* (1857)



A view and plan of the agricultural and manufacturing villages of unity and mutual co-operation  
*Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor* (1817) 所収



# イギリスにおける協同組合思想 萌芽からロッチデール原則まで

## < オウエン以前 >

ブロックホイ (P.C. Plockhoy 1620 頃-1700 頃) は、1659 年に *A way propounded to make the poor in these and other nations happy* (貧民を幸福にするための方法) において、農業と工業とが有機的に結合され、キリスト教精神に導かれた共同労働と共同家計が営まれる協同組合制度「小共和国」を提示した。



ベラース (J. Bellers 1654-1725) は、1695 年 *Proposals for raising a colledge of industry of all useful trades and husbandry* (産業学寮設立提案) において労働者およびその家族を収容する産業学寮の設立を提案した。鋭い社会批判と農工共同体の提案、教育と労働の結合、児童教育の重視、労働を価値の尺度とする考えなどオウエンの先駆けであった。前出の『自叙伝』によれば、1817 年、その提案を読んで共感したオウエンはそれを 1,000 部印刷して配布したとあり、本学所蔵カール・メンガー文庫にそのうちの 1 冊が納められている。



*A way propounded to make the poor in these and other nations happy* (1659)

*Proposals for raising a colledge of industry of all useful trades and husbandry* [1817? Reprint]

## < 「ロッチデール公正先駆者組合」の誕生と発展 >

19 世紀に入り、産業革命を経過することによってイギリス資本主義は、機械制大工業の生産力を基盤に世界の工場としての地位を確立するに至った。しかし、その過程で多数の小生産者の没落による深刻な失業と貧困といった社会問題を生じさせた。イギリスの協同組合運動は、そういった社会状況のなかから労働組合や社会主義運動と未分化の形で起こってきた。

1840 年代ランカシャの綿紡地帯ロッチデールにおいても、労働者は貧困にあえいでいた。そのような状況のなか、オウエンの協同組合思想の影響を受けていたフランネル織物工委員会は、ロッチデール公正先駆者組合 (Rochdale Society of Equitable Pioneers) を開設した。

28 人の労働者によって 1844 年 12 月 21 日トード街に誕生した組合店舗は、商品も小麦粉、バター、砂糖、オートミールの 4 品目のみ、開店時間も月曜と土曜の晩だけというささやかなものであった。



*Catalogue of the Library of the Rochdale Equitable Pioneers' Society Limited* (1868)



「ロッチデール公正先駆者組合」創始者のうち 13 名の写真  
*The Rochdale pioneers : a century of co-operation in Rochdale* (1944) 所収

しかし、その後の先駆者組合の発展はめざましかった。1844 年から 1855 年の間に組合員数 50 倍、基金総額約

400 倍にも増大した。1850 年には、協同穀物製粉所を開設、翌 51 年には店舗を毎日開店することになった。さらに 1854 年には、ロッチデール生産協同組合を設立、1867 年には、1,400 人収容の会議室や蔵書数 12,000 冊の図書室も持つ中央店舗 (Central stores) が総経費 13,360 ポンドかけて建設された。

組合員の知的向上のためつくられた先駆者組合の図書室の蔵書目録 *Catalogue of the Library of the Rochdale Equitable Pioneers' Society Limited* (1868) には、10 支部の図書室の新聞リストも載っており、巻末には幻灯機、顕微鏡や双眼鏡の貸出についての記載がある。

一方、1852 年に「産業・節約組合法」が成立すると、先駆者組合を模範とする消費協同組合が数多く生まれた。



G.J. Holyoake  
*Life and letters of  
George Jacob  
Holyoake* (1908)  
所収

それを側面から援助したのが、ホリヨーク (G.J. Holyoake 1817-1906) であった。彼は、1843 年にオウエン思想の社会宣教師としてロッチデールを訪れており、先駆者組合の歴史を記した *Self-help by the people : history of co-operation in Rochdale*(1858)を著した。この本は版を重ね、イギリスだけでなくヨーロッパ諸国まで「ロッチデール方式」を広く紹介し、消費協同組合の普及に貢献した。

*The history of the Rochdale pioneers* (10<sup>th</sup> ed. 1893) 口絵は Central Stores

## <ロッチデール原則>

先駆者組合以前にも協同組合経営による店舗は、数多く存在した。しかし、そのいずれもが長続きしないまま解体していった。その中で、先駆者組合が、消費協同組合の原型として著しく発展し、現在まで引き継がれてきた理由は、のちに「ロッチデール原則」といわれる協同組合の経営理念にあった。

先駆者組合設立当初 1844 年の最初の規約 *Laws and objects of the Rochdale Society of Equitable Pioneers* では、「自給自足の国内植民地の設立」を目的としており、オウエン主義的協同組合思想の強い影響が認められる。しかし、同時にそれは、「組合の金銭的利益」の実現を第一義的目標として掲げ、そのために購買高配当を中心とする諸原則を確定した。

先駆者組合が案出した原則は次のものである。 民主的運営 - 出資の多寡や性別に関係なく一人一票の議決権を有する。 自由加入制 - 門戸の開放と加入・脱退の自由 出資金に対する利子の固定あるいは制限 購買高配当 - 市販販売によって生じた余剰金を組合員の購買高に応じて配分する。 現金取引 純粹で混じりものない商品のみを販売する - 量目を正確にし、品質本位とする。

教育の推進 - 余剰金の一部をもって組合員の教育の推進を図る。 政治的・宗教的中立

これらの原則は、先駆者組合以前の協同組合運動や労働組合運動の経験や成果から採択したもので、決して新しいものではなかったが、それが組みあわされて協同組合の新しい形態を創りだした。先駆者組合は、一方で資本主義経済に適応する形で協同組合運動の自立を図り、他方で「公正」を社会的に貫徹させる形で資本主義経済に対する批判を展開した。

## <ロッチデール原則と協同組合原則>

この「ロッチデール原則」の精神は、国際協同組合同盟 (International Co-operative Alliance 略称 ICA) の「協同組合原則」へと受け継がれている。1895 年に国際的な組織として成立した ICA では、その加入資格をロッチデール原則を遵守している組合に限るとしていた。しかし 1917 年のロシア革命後、共産主義政権下にある協同組合が真にロッチデール原則を遵守できているのか、すなわち「政治的中立」ということをめぐり加盟する組合間で原則の解釈に揺れが生じていたことから、協同組合間での共通認識として ICA で「協同組合原則」が制定されることになる。これが第 15 回パリ大会 (1937 年) において採択された「協同組合 7 原則」であり、この初期の原則ではロッチデール原則の影響が色濃く反映されている。これは、協同組合原則を制定するにあたり、そもそもロッチデール原則とは何かということをもとめた上で採択されたということによる。

時代が変化するにつれて「協同組合原則」の内容も変化している。現金取引の原則の代わりに協同組合間協同の原則が新たに取り入れられるなど国際情勢の変化、また原則そのものが時代と合わなくなるという現象に対応したものである。幾度かの変遷を経て、現在では 1995 年に採択された「国際協同組合同盟・協同組合のアイデンティティに関する声明」において協同組合の定義、価値と共にそれらを実践するための指針として 7 つの原則が協同組合原則と紹介されている。



*Laws and objects of the  
Rochdale Society of Equitable  
Pioneers* (1844)

## 日本における協同組合思想 一橋を中心に

### <明治初期の協同組合思想の受容>

イギリスで展開した協同組合思想は、日本では明治初期に輸入書籍が流入するとともに、その翻訳書によって普及した。これらの初期の翻訳書のなかには教科書として使用されたものもある。例えば、本学の前身の商法講習所の教科書一覧にもフォーセット、ペーリー、ボウエン等の名前が見られる。



宝氏経済学 (1877)



初学経済論 (1877)



馬場武義「協力商店創立ノ議」『郵便報知新聞』1878年7月5日

M.G.フォーセット(Millicent Garrett Fawcett 1847-1929)の *Political economy for beginners* は、1873(明治 6)年に林正明(1847-1885)による翻訳書『経済入門』が、1877(明治 10)年永田健助(1844-1909) による翻訳書『宝氏経済学』が出版され、日本への協同組合思想の流入に大きな役割を果たしたとされている。永田健助はさらに『経済説略』を編集し、ロッチデール公正先駆者組合についてより詳細に紹介している。また、明治初期の協同組合思想導入の代表例としては、A.B.メイスン(Alfred B. Mason 1808-1868)とJ.J.レイラー(John J. Lalor 生年不詳-1899)の *The primer of political economy* を翻訳した『初学経済論』も有名である。牧山耕平によるこの翻訳書は、1877(明治 10)年に出版され、その後の研究や消費組合運動に多大な影響を与えた。

日本人によるイギリス消費組合の紹介は、1878(明治 11)年『郵便報知新聞』に掲載された馬場武義の「協力商店創立ノ議」が最初である。この翌年、共立商社その他の日本初の消費組合が設立された。

消費組合の発祥の地とされたロッチデールには多くの外国人が訪れており、日本からも1872(明治 5)年に会津藩士野口富蔵と土佐藩士松井周助が訪問したのを皮切りに、多くの関係者・研究者が視察に向かった。彼らの訪問記もまた日本にイギリスの消費組合思想を伝えるのに一役買うことになる。

### <本学における協同組合研究>

明治後半から昭和に至るまで本学で教鞭をとった上田貞次郎(1879-1940)はロバート・オウエンや協同組合に関する論考を多数発表している。国家の指導する産業組合を批判し、オウエンに始まる自律協同の精神を基とした協同組合を説く彼の主張は、その後の思想と運動に影響を与えた。

上田の指導を受けた緒方清(1896-1934)は、イギリス留学中に英文で書き上げた *The co-operative movement in Japan* で学位を得、世界に日本の協同組合を紹介するのに貢献した。帰国後は本学の助教授として迎えられ、社会政策を講ずるとともに、消費組合研究に精力的に取り組む。レーニン(Lenin 1870-1924)によって生み出された政治主義的なモスクウ式消費組合



上田貞次郎

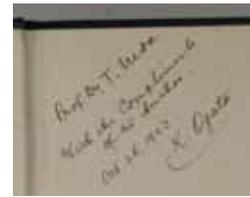
「産業組合か協同組合か」

『産業組合』237号 (1925.7)

ではなく、経済主義的なロッヂデール式を是とするところが、彼の主張の特徴である。



▲緒方の肖像 協同組合研究(1935)所収



上田宛の献辞

◀The co-operative movement in Japan (1923)

## ＜一橋消費組合の歴史＞

一橋消費組合は、1910(明治 43)年 9 月 23 日 設立の決議を行い、一橋会に附属して設置された。これに先立つ 1903(明治 36)年の一橋会発会式に際し、福田徳三(1874-1930)が消費組合設置を希望すると演説している。本学の学問・思想形成に影響の大きかった福田は協同組合にも大きな関心を寄せ、『国民経済講話』ではイギリスのロッヂデールやドイツの消費組合事情を紹介している。一橋消費組合は、1898(明治 31)年の同志社大学購買組合(一年足らずで消滅)を除くと、1903(明治 36)年 9 月に発足した慶應義塾に次いでかなり早い時期の成立であった。学生全員の参加する自治会である一橋会の財源確保のため設置されたこと、教員主導で学校監督下に置かれたことがその特徴である。



国民経済講話 (1917)



東京商科大学  
卒業記念写真帖 (1930)



◀籠城事件写真帖 (1961)

1923(大正 12)年 9 月には一橋会の会計から切り離されて共益部となるが、その業績は不振であった。1928(昭和 3)年に発足した消費組合研究会によって共益部改善問題や東京学生消費組合への加盟問題が議論され、1929(昭和 4)年 5 月一橋消費組合として再出発することになる。同年 6 月、学生運動取締りのため西神田警察署が業務停止命令を下したことから、東京学生消費組合には加盟せず、独自路線を歩んだ。1931(昭和 6)年、本学予科・専門部廃止に反対して勃発した籠城事件に際しても、食料・物資の調達に活躍している。

戦時体制が人々の生活に影を落とし始める中、1940(昭和 15)年、東京学生消費組合は強制解散の通告を受け、一橋会にも文部省から解消の指示があった。翌年 2 月、一橋消費組合は三科報国団からなる新一橋会本部の直属団体となり、敗戦の日まで活動を行うことになる。

戦後は、食料・物資の不足の中、いち早く

1946(昭和 21)年 6 月 25 日に一橋消費組合再開状況の記事が一橋新聞に掲載されている。1948(昭和 23)年には、教職員と学生を組合員とする生活協同組合定款が定まり、一橋消費組合は正式に再開した。

なお、現在の一橋大学消費生活協同組合が消費生活協同組合法に基づいて設立認可を受けたのは 1957(昭和 32)年のことである。

## 日本で紹介されたロバート・オウエン

オウエンの名前が登場する最初の日本の文献は、西周(1829-1897)の『百学連環』と言われている。これは1870(明治3)年頃に西が行った学問論を、門下生永見裕が記録したもので、百科事典形式の一項目になっており、大久保利謙編『西周全集』第4巻(宗高書房)に再録されている。

次にオウエンの記述のある文献は、1874(明治7)年に分冊で発行された『百科全書』の「交際編上」である。本学所蔵本の見返しには文部省とあり、巻首には「百科全書/交際篇上/高橋達郎訳編」とある。トーマス・モアのユートピアを紹介し、その実行者としてオウエンとフーリエの名を挙げている。

1883(明治16)年発行のミル原著『弥児経済論』、フォーセット原著『政治談』、1886(明治19)年発行のマーシャル原著『勸業理財学』などの翻訳書によっても、オウエンの名は紹介されたが、日本人が書いた本でオウエンを説明した章を持つのは、1891(明治24)年の『社会党瑣聞』が最初である。石谷斎蔵の著述兼発行だが、これは『明治文化全集』第15巻(日本評論新社)に再録されている。



『百科全書:交際編上』(1874)

『弥児経済論』(1883)

『百科全書:交  
『社会問題研究』第14冊(1920)

雑誌論文中にオウエンの名が出てくるのは、1881(明治14)年の『六合雑誌』7号に載った主宰者小崎弘道の「近世社会党ノ原因ヲ論ス」である。1898(明治31)年には河上清が同じく『六合雑誌』に「消費者協力組合論」という論文を210、211、214の3号に亘って載せ、オウエンにも言及しているが、翌年の同誌222号に「英国社会主義の木鐸ロバート、オーエンを論ず」を書いた。これがオウエンを主題とした雑誌論文の最初である。

この後、著書や雑誌論文のなかでオウエンに触れる文献はたくさん出て、明治の末期には紹介が盛んになった。なかでも、1920(大正9)年から翌年にかけて、河上肇(1879-1946)が個人雑誌『社会問題研究』に9回に亘って連載した「ロバート・オーウェン(彼れの人物、思想及び事業)」は、かなりの影響力を持った。

オウエンの著作の翻訳は、1925(大正14)年の『大原社会問題研究所雑誌』3巻1号に、大林宗嗣が「ニュー・ラナーク講話」を訳出したのが最初である。

1924(大正13)年に発刊された『一橋新聞』1号には、猪谷善一著「英国労働学校の誕生」が掲載され、労働者教育の重要を力説した第一人者としてオウエンを紹介している。また、1925(大正14)年から翌年にかけて『一橋新聞』に4回に亘って掲載された「工業制度の影響に関する考察」は、本学所蔵カール・メンガー文庫中のオウエン著述原文を山中篤太郎(1901-1981)が訳出したものである。

1927(昭和2)年に、本学出身の北野大吉(1898-1945)が『ロバート・オーウェン:彼の生涯、思想並に事業』という本を出したが、これはオウエンを主題とした図書の最初である。

## 一橋大学所蔵オウエン・協同組合関係資料

一橋大学には昔から、ロバート・オウエン関係の文献が相当数所蔵されていたが、これに後年、以下に紹介するような文庫・コレクションが加わり、オウエンおよびイギリスの協同組合、社会主義運動に関する世界有数の蔵書が形成されている。文庫・コレクション以外の一般図書も含めて、附属図書館、社会科学古典資料センター、経済研究所資料室、社会科学統計情報研究センター、イノベーション研究センターのそれぞれに関連文献が所蔵されている。

### 外池文庫

ロンドンの古書籍商ピーター・イートン (Peter Eaton 1914-没年不詳) の収集した協同組合運動、ロバート・オウエン関係文献・史料を、本学出身 (1910(明治43)年、東京高等商業学校本科を卒業) の外池五郎三郎 (1888-1982) 氏 (化粧品メーカー柳屋本店社長) が購入し、1959(昭和34)年に母校に寄贈したものである。イートンは自身の出身地ロッチデールに因んで、イギリス協同組合の起源と発展を中心として、周辺の地方史やイギリス社会思想史をも包括した収書をおこなった。ロッチデール公正先駆者組合の原典資料や、オウエンをはじめとする手稿類も含んでいる。

貴重図書 (1850年以前の刊行物、および、手稿等) は社会科学古典資料センター、それ以外は附属図書館に配架。洋書 2,183 冊。冊子体の『外池文庫目録』が1959年12月に刊行されている。

### 星島コレクション

立教大学および上智大学教授であった星島茂(1891-1961)氏が収集したロバート・オウエン関係の文献。社会科学古典資料センター所蔵。洋書約250冊。コレクションとしての別置はしておらず、一般貴重書に混配している。

星島氏は、早稲田大学出身で、ヨーロッパ留学中にロンドンで古書店に通い、オウエンの著作を中心に社会科学関係の書物を博搜した。当時1920年代のヨーロッパには、ソ連のマルクス・エンゲルス研究所のために所長リャザノフ(David Riazanov 1870-1938)が文献を大量に買い付けに来ており、星島氏とリャザノフはオウエン関係の文献をめぐる競争になった。

星島コレクションを一橋大学が丸善から購入したのは1944(昭和19)年秋だが、国立キャンパスへ搬入したその数日後には江戸橋の丸善の書庫は空襲で焼失してしまった。このコレクションは、危うく焼失の危機をまぬがれたのである。さらに、この丸善からの購入分以外についても、星島氏の自宅を直接訪問して、他の売却先の書店を尋ね、また、手許に残っていた残部の譲渡をお願いした結果、星島氏が収集したオウエン関係のコレクションはほぼ完全な形で一橋大学に収蔵されるに至った。

### Co-operation in Great Britain

#### コレクション

イギリスの協同組合に関するコレクション。研究書のほかに、協同組合運営の実務に関する資料も含んでいる。経済研究所資料室所蔵。洋書174冊。

### 一橋大学附属図書館

2005(平成17)年11月1日発行

〒186-8602 東京都国立市中2丁目1番地

URL: <http://www.lib.hit-u.ac.jp/>

TEL: 042-580-8224 ( 学術情報課学術図書総務係 )

FAX: 042-580-8232 ( 学術情報課 )

本パンフレットに掲載された文章、写真、図版等の著作権は、特記あるものを除いて一橋大学附属図書館または経済研究所に属します。著作権者からの許諾を得ずに、著作権法の定める範囲を超えて、引用、複写、電子媒体化等を行うことは、禁止されています。

【図書整備支援資金へのご協力をお願い】貴重な資料を後世に伝えるためには専門家による修復や保存設備の整備が必要です。一橋大学では学術資料の充実や保存、学習環境の整備等のために基金を設け企業および個人の皆様からのご寄附を付けています。基金の詳細やご寄附の手続等につきましては、本学 web サイト (<http://www.hit-u.ac.jp/kifu/>) をご覧ください。